自閉スペクトラム症のある女性が安心して子どもを育てるための支援

関連するSDGsの国際目標



人間看護学部　人間看護学科　　准教授　　小林　孝子
研究分野：公衆衛生看護学　母子保健

自閉スペクトラム症を含む発達障害が注目され支援制度が整備されてきたのは、1990年代半ばです。その後約30年を経過し、妊娠・出産・育児を経験する発達障害のある女性は増加しています。発達障害のある女性は、妊娠中から出産、育児期にかけて、多くの困難な状況を抱えていることが報告され、心理社会的問題への対応は急務となっています。現在行っている研究では、自閉スペクトラム症に焦点を当て、インタビュー調査を実施しています。自閉スペクトラム症がある女性の経験を基に、専門職や家族の経験知を統合し、支援ニーズを明らかにしていこうと考えています。自閉スペクトラム症のある女性が、安心してその人らしく、妊娠から育児期の生活を送ることができることを目指しています。

■安定した育児につながる要因

自閉スペクトラム症のある母親は、日々の子育てや家事の細かなタスクを、パターン化するという方策で乗り切っていました。しかし、マルチタスクや臨機応変な対応を求められる育児において、パターン化することでうまくいかない場合には、固定されたパターンをはずし、新たなパターンにのりかえる対処を行っていました。また、苦手なところやできないところは全面的に代行してもらうことで円滑な生活を送っていました。さらに、これまでの人生で生きづらさを経験してきたことから、子どもを健全に育てるために努力することや、責められない支援を受けること、マジョリティとは距離を置き仲間とつながる心地よい場をつくりだすことをしていましたが、これらのことは自分自身のためだけではなく、同じ特性をもつ仲間のためにもなされていました。そして、子どもを思いやり、子どもや社会との関係性のなかでの自己をイメージし、子育てのなかで多くの肯定的な経験を重ねていることを明らかにしました。（自閉スペクトラム症の特性がある母親の育児の経験：安定につながる要因の検討, 2022より）

■出産後に子どもをかわいいと思えなかった母親が子どもとの間に形成する絆

出産後は複層的な困難な状況と母親役割の負荷が大きく、子どもとの情緒的絆は形成されていませんでした。その後母親役割から解放されることや時間が経過することで、絆が形成されていました。その絆は子どもとの距離があり、標準的な母親像からも離れている独自のものでした。自閉スペクトラム症女性の育児は、ありのままで尊重されるべきであり、多様性が尊重される枠に収まらない支援の提供が望まれることを考察しました。（産後子どもをかわいいと思えなかった母親が子どもとの間に形成する絆―自閉スペクトラム症のある女性の語りから―, 2023より）

■子育て中の母親の「安心」とは

安心は子育て中の母親からよく聞かれる言葉です。育児支援施策でも多用され、目指すものとされています。この研究では、子育て中の母親の「安心感」を測定する尺度を開発しました。母親へのインタビュー調査、概念分析、2段階の調査を実施しました。尺度は、3因子「肯定感がある」「おだやかである」「周囲とのつながりがある」の35項目から構成されました。